暁杜「山霞」

おだまきかこ

暁杜　「山霞」

はじめに

蒼紫×巴のリベンジ作品です。「御影華」「蒼紫月影抄」とは設定など大幅な改編があります。長編なので、まずは第一章と第二章をまとめてみました。章だては以下のとおりです。

序
第一章　爪牙
第二章　挽歌
第三章　道行
第四章　北帰航
結

二〇一〇年八月

おだまきかこ

目次

山霞　序 …… 1
爪牙（一） …… 6
爪牙（二） …… 12
爪牙（三） …… 18
爪牙（四） …… 24
爪牙（五） …… 30
爪牙（六） …… 36
挽歌（一） …… 39
挽歌（二） …… 44
挽歌（三） …… 49
挽歌（四） …… 53
挽歌（五） …… 61
道行（一） …… 66

山霞　序

『山霞（やまがすみ）』・序

にび色の空が何処までも広がっている先に、一羽の鷹のはばたきがあった。
鷹は、まだ歳若い少年の手から中空に放たれたのであった。
少年は藍色の庭着のようなものを着て、高く髪を後ろに結わえていた。
その様は、遠目にも白く、すらりと浮き立って見えた。

「殿、いかがでございます。このほどの鷹狩りは・・・・。」
「うむ。苦しゅうないぞ。鷹もほどよく慣れている。御庭番衆は、よい仕事をしているな。」
「御意にござります。」
四方にむかって張られた天幕の中心の椅子に、将軍は腰掛けている。
それは、蒼紫らが仕える江戸幕府の御代様である。
しかし、その面前に出られる機会は、このような鷹狩りなどの時よりほかにはない。
将軍のそばには相談役がいて、蒼紫らの様子を逐一伝えているのである。

鷹狩りをすると言っても、将軍自らが行うのではなかった。将軍は腰掛けたまま言った。
「あの鷹を扱っている者はまだ少年だな。なぜあのような者に扱わせるのだ?」
将軍が珍しく、質問をした。
あわてて相談役が走って行き、蒼紫のそばに立つ御頭に言葉を伝えて戻ってきた。
「おそれながら、もっとも御庭番衆内で今、才能がある若者らしい、ということでございます。」
「ほう。まだ十四五六ほどではないか。余は話をしてみたい。」
「め、めっそうもございませぬ。あのような下賤な輩は、将軍様の身辺には近づけることはできませぬ。」
「ふむ。そうか。名はなんと申す。」
相談役がまた走って行って戻ってきた。今度は息を切らしていた。
「四乃森、蒼紫、という名でございます。」
「ふむ。四乃森。お取り潰しになった御家人にそのような名の者がいたような・・・・・?はて、余の思い違いか。」
蒼紫はその様子を遠くから眺めていた。
自分たちを支配してやまない存在――――将軍家。
自分は武士の地位を剥奪されて、今は下人として生きている。
そう叫びたい気持ちを、蒼紫は抑えていた。

言ったところでどうにもならない。
どうにもならない壁が、自分とあの将軍の間には、ある。ありすぎる。
「蒼紫、行ったぞ。」
老人の言葉に、犬たちがほえて行く先に向かって、蒼紫は走りながら、すばやい動作でまた鷹を放った。
それは鷹とほとんど一体となったかのような見事な動きだった。
鷹の世話をするのは、蒼紫は好きだった。
そのような生き物の世話をするのは、心があたたまる。
敵に対して刃を向ける時に比べ、どれほど心がやすらぐだろうか――。しかし、蒼紫はそのことを決して御頭である老人には告げなかった。
そうしたことを告げると、自分は今のやや安泰とした地位を剥奪され、御庭番衆から追放されるかも知れないからだ。
安寧を夢見ることは、禁じられていた。
ただ、どんなに苦しくても自分は自分の今の道を進むだけだと思った。思っていた――その日までは。

「鷹狩りは見事に仕事をこなしたようだね。」

蒼紫は今、将軍のいた草原からはるかに離れた、忍びの里の一角の番屋に座っている。
目の前に囲炉裏の炎が燃えていて、その前に朱の唇を引き結んだ「月の輪の宮」、笹葉霞（ささ・はがすみ）が蒼紫と向かい合って座っていた。
葉霞は、女忍者たちの統率者である。
長い黒髪をした、絶世の美女と言っていい。
そして――――。
「おまえ、幾つになった？」
葉霞が朱唇をひきあげて聞いた。
「かぞえで十五になります。」
「それなら遅いぐらいだねぇ。女を知るのは。」
葉霞は目を細めた。
目の前の少年は、まるで自ら光輝く玉のようだ。
――――ほんとうに、美しい、少年ね。
葉霞は手を伸ばして、蒼紫の髷に触った。

「私と寝たら、この髷は落とすんだよ。」
蒼紫の表情が、険しくなった。
「なんだい？まさか武士の鑑とかまだ思っているんじゃあないだろうねぇ。」
その一言、一言が蒼紫の神経を逆撫でするようだった。
しかし拒絶や抵抗は許されないのだ。
蒼紫は、あの老人の命で今ここに来ているのだ。

――――この者は、母上とは違う。

蒼紫の必死の抵抗する思いは、今それだけであった。
そうして目の前の女を否定したいのだが、女は赤い唇を開いて、蒼紫にとろりと絡み付いてきた。
「最初なんだろ？やさしくするよ。」
葉霞はふふふ、と低く笑うと囲炉裏の火を落とした。
蒼紫は逃れられない腕の下で、ただ運命というものは暗澹としたものだと、感じていた。

爪牙（一）

黒の着流しを着た浪人姿の侍が、肩で風をきって江戸吉原の一角の茶屋に入って行った。
腰の刀を男衆に預けると、浪人は物慣れた様子で、座敷にあがった。
ぼんぼりが開け放した廊下に向かって灯っている。
緋毛氈を敷いた上に、客の「なじみの」妓が、いた。
「よう。久しぶりだな。」
言うなり浪人はどっかりとあぐらをかいて座った。
その前に、きらびやかな衣装の妓が手をついて言った。
一の太夫ではない。しかし、それなりに箔のついた身なりだった。
「志々雄さま、ようお越し。お待ち申しておりましたえ。」
「由美、元気にしていたか。酒。」
杯をつき出すのに、由美と呼ばれた女はなみなみと酒をついだ。
志々雄真実と由美であるが、後年十本刀を擁したときの面影は、まだ二人にはない。
志々雄はまだ若く、その顔は整っており、頭はそりあげて髷を結っている。
由美も年増の色気よりもまだ、若さが目立つ様子だった。
その二人が酒盛りを始めると、すぐに音曲を担当する芸子らが、下の席で三味線を引き出した。
音の音色が何か暗い。

由美は少し気になって、そちらの方を見た。
いつもの芸子ではない。が、気にもとめずに由美は志々雄にしなだれかかった。
「志々雄さま、私、落籍したいのです。」
「ん？その話か。それにはまとまった金がいるだろう。俺は京に上ることにした。」
「まあ、京にですか。」
「京では土佐勤皇党が、ばさばさ人を斬っていやがるところだ。俺のような浪人者には、もってこいのところさ。近頃は長州の連中も、天誅に加わっているらしい。幕府も大変だな。」
「志々雄さまは、幕府と勤皇と、どちらの味方なんですの？」
「俺か。俺は強いほうの味方さ。まあ攘夷派だな。幕府はもうとっくに屋台骨がいかれている。」
杯をなめながら言う志々雄の瞳には、冷酷な光が灯っている。
――こわいお人。何人でも斬るおつもりね。
と、由美は思いながら、酌をしながらささやいた。
「土佐に・・・つくのですか。」
「ん？それは聞くだけ野暮というものだろう。」
「そうですわね。失礼しました。」
「まあ行ってみなくちゃわかんねぇさ。」
志々雄はそう言うと、ひとしきり笑った。

と、その時だった。三味線の弦が切れたような音がした。
「・・・・あんた・・・・!」
由美の顔が険しくなった。
由美は音をはずした芸子に向かって、しかりつけた。
「新入りだね。ろくに三味線が弾けやしないのに、こんな上座にまでのぼってきたのかい。」
芸子は消え入りそうな声であやまった。
「すみません・・・・。」
「あんた、何か暗いねぇ。もっとぱーっとしなさいよ。酒の席なんだから。」
「はい・・・・すみません。」
すると音をはずした芸子の横についていた、もう一人の芸子がなだめるように小声でつぶやいた。
「巴ちゃん、気にせんでええの。」
「はい。すみません・・・。」
二人は三味線の演奏を、何事もなかったように続けた。
すぐに由美は忘れて、目の前の志々雄との楽しいひと時のほうに没頭した。

「君菊さん、ごめんなさい、つい爪がすべってしまって。」
宴がはねた後、廊下を歩きながら巴はまた、先輩の芸子にあやまった。
「いいのよ。あんた気になったんでしょう。土佐勤皇党。」
「えっ。」
巴はどきりとして、目を見張った。
その藤色の小袖の上の顔は、驚くほど白かった。
君菊は髷をかんざしでいじくりながら、言った。
「身につまされるのよ。あんたの弾く三味線を聞いているとね。男を――――京で殺されたんだろう。」
「はい・・・・・。ご存知なんですね。」
「そりゃあんたの仕事を世話した時に、聞いているからね。武士の娘なのに、吉原で三味線弾きかい。」
「弟を育てるためなんです。」
「それだけとは思えないねぇ。あんた、その男のこと、捜しているんだろ。わかるんだよ。」
「・・・・・・・・。」
「どうやって殺されたか。殺したのは誰か。奉行所はあんたに何も言わなかったのかい。」
「ごめんなさい。その話なら、いずれまた――――。」

「あっ、ちょっとお待ちよ。」
巴は面を伏せると、廊下を後にした。

巴は思った。

たずねている。
確かに私は、たずねている。
京で、婚約者の清里を殺した者を――――。
まず、清里を京にのぼらせた男を見つけ出さないと。
そうしないと、あの人が浮かばれない。
たとえあの人が――――私を乱暴に抱いて、江戸に捨てて行ったのだとしても――――。

巴は心細さに三味線をかき抱いた。
その軸には、仕込み刀が入っている。
短刀が柄のところに入っているのだ。
なんて悲しい音色だろう。この三味線の音色は。

巴が、音曲と武芸のたしなみが少しあるというのを見て、奉行所は巴をそのような間者に仕立てたのだ。

断ることはできなかった。

巴を守ってくれる、巴の父も母も今はもういない。弟と二人きり――――そこに、奉行所はつけこんだのだ。

ただし、まだ巴は真の闇の者ではなかった。

そのような者が闇にうごめいていることも知らず、巴はただ短刀一本で、清里が消えた消息をつきとめようというのだった。

――――土佐勤皇党。もしくは、長州の者。

今志々雄がもらした言葉が、かすかな手がかりだった。

――――京に、のぼらねばならないのだろうか。縁をどうしよう。

巴は不安なまま、鳥追い女の姿になって、吉原の大門の下をくぐった。

爪牙（二）

話はそれより一ヶ月ほど前にさかのぼる。

雪代巴の婚約者・清里明良は、講武所を出た帰りに、一人の男に呼び止められた。

男とは何度か表通りの普通の茶店で会って、京にのぼる相談をしていたのである。

清里はにっこり笑って男に言った。

「飯塚さん。決心はつきましたよ。京都見回り組。腕にそう覚えはありませんが、市内を巡回して回るだけなのでしょう。それで給金がこんなに入ると聞いたら、やはり、所帯を巴と持つ身の上、私も御家人勤めだけでは巴を幸せにはできないと思いまして。」

飯塚――この男は、後に剣心のそばに現れて、長州方の間で暗躍した男だが、このときはまだ江戸にいたのであった。

飯塚が清里の仕事を斡旋したのである。

飯塚は、この頃は江戸で京都見回り組の人員を募集しているのを、手伝っていたのである。

飯塚は清里の肩を抱くようにして、近寄ると声を潜めて言った。

「兄さん、そいつは結構な話だが、用心してかからねぇと。巴って女・・・・・おまえさんの恋女房だろ？」

飯塚の言葉に、清里はのぼせたように頬を赤らめた。

純情な男なのである。

「まだ・・・・女房と呼ぶのではありませんが・・・まだ、婚約者ですから、私は。」
飯塚の目が光った。
「馬鹿言っちゃいけねぇ。京都にはどんな送り狼がいるかわからねぇんだぜ。その前にしっかりと、こう、抱いてやってからでねぇと。」
「そ、そんな、私は・・・・巴とは・・・・。」
「おまえさん、京都で死ぬかも知れないんだぜ。」
飯塚の言葉に、清里の声が裏返った。
「わ、私が死ぬ？そんな、そんなはずはないでしょう？そんな危険な任務ではないと――――。」
飯塚がなだめるように言った。
「そうそう。そうだった、そうだった。つい言葉がすべっちまった・・・・・。あやまるぜ。ただ、女を江戸に残しておくんなら、どんな悪い虫がつくかわからねぇ。やっちまったほうが賢明かなあ、って俺は思うのよ。ま、その道の先輩としてだな。」
「・・・・・・・・。」
「それにそのほうがおまえさん、職務に専念できるんじゃねぇのかな、と俺は思うのよ。江戸に残してきた女のことが気がかりじゃ、剣先もにぶる、ってもんだな。腕に自信がないならなおさらのこった。」
清里は飯塚の言葉を聞いて、しばらく考えこんでいたが、やがて決心したように言った。

「わかりました。だ、抱けばいいんですね。しかし、巴が私を許してくれるだろうか。」
清里の言葉に、飯塚はからからと笑った。
「何緊張してんだ。てめぇの女房になる女だろ？それが早いか遅いかの違いだけじゃねぇか。ま、肩の力を抜いてがんばりな。それじゃ俺はこれでな。あばよ。」

その清里が京で死んで、巴は奉行所の入り口に立っていた。
清里との一夜を巴は思い出す。
――おやめください、清里さま。
――いいじゃないか、巴。京に行くんだから、少しぐらい。悪いようにはしない。
――清里さまが、そのようなことを、私になさるとは――ああっ。
清里に無理やり脱がされて、強引に押し切られた。
それでも私は、清里が好きだと思う――思わないといけない。
そうでないと、死んでいったあの人があんまりにもかわいそうだ・・・・・。
巴はそのことを思うと、心が悲しさにふるえる。
巴は評定の間に座った。
清里の死についての取調べである。

奉行は巴の前に座り、畳に扇子をつくと、重々しい声でこう切り出した。
「そのほう、清里明良に京都見回り組を斡旋した男を知っているか。」
巴は小さくかぶりを振った。
「いえ・・・・存じません。京にのぼることは、清里が一人で決めました。わたくしは何も。」
「そうか。」
奉行はそう言うと、人を呼ぶように言い、巴に言った。
「そのほうは聞くところによれば、武芸諸般にも武士の娘としてのたしなみを備え、音曲にもたけておると聞く。市井に埋もれるには全く惜しい人材である。ひとつ、武士としてその類まれなる資質を幕府に役立ててもらいたい。」
巴はあっけにとられた。
話が清里のこととつながっていない。
「私に何か・・・・せよと仰せでございますか。」
「その通りである。実は、京都見回り組に募集した隊士の多くが、京都で消息を絶っている。幕府の人員が、無駄に浪費されておるのだ。まことに嘆かわしい事態であると言わねばなるまい。次々と隊士補充に応募した者が死んでいくのだからな。」
「それは・・・・・京都に攘夷派がいるからでござりましょう。私は、そんな恐ろしい者たちとは。」

奉行は巴の言葉に含み笑いをもらした。
「そうではない。まず、その方には、京都見回り組を斡旋した者の名前をつかんでほしいのだ。そのためには、浪士らが出入りしている茶店などを回ってほしいのだ。そちにこれを与える。」
武士の一人が入ってくると、巴にひとつの三味線を押し付けた。
奉行は言った。
「柄のところを抜いてみよ。短剣が入っている。」
巴の顔が真っ青に変わった。
「いっ、いやでございます。」
奉行はなめるように巴の顔を見た。
「ほほう、いやと申すか・・・・・拒否は許されぬぞ。そちの弟・雪代縁の命は、本日より奉行所が預かることにする。」
巴の目が驚愕に見開かれた。
「えっ。」
「だからこれは、そういうことだ。これにて重畳。」
巴はその場で崩れるように倒れた。
――清里は・・・・・清里は・・・・私を・・・・・とんでもないことに・・・・。
いえ・・・・・そう思ってはいけない・・・・・清里さまは、私のために京都で死んだのだから・

・・・・・・。

巴はまた、吉原の一角に鳥追い女の姿で立っている。戻り女の姿に化けているのである。。
白い着物を着て三味線を抱えて、ひっそりと立つ巴の姿に目をとめる者は誰もいなかった。
まだ大門は出店の時間ではないので、客の人通りはまばらである。酔客の姿はあまりなく、通りはこれからの夜の支度の人々で少々にぎわっている。巴の立つ前の道を、天秤棒を担いで野菜売りなどがひっきりなしに通っている。
巴はおどおどと、大門近くの背の高い杉の木の影に身を潜めて立っていた。
そこへ一人のさむらい風の男がのっそりと近づいた。
男は低い声で巴に言った。
「三軒先の茶店に入っている。早く行け。」
「はい。」
巴は小さくうなずくと、三味線を抱えて必死の思いで前に歩き出した。

爪牙（三）

巴はその茶店の座敷に通されると、すぐに三味線を弾くように言われた。
巴以外にも二人ほど、容貌の目立たない女がお囃子をたたいていた。
巴は集まっている男たちを眺めた。
いずれも浪士風の者ばかりだが、車座になって密談をしていて、酒を盛んに注ぎあっている。
その中の一人の男が、巴に目配せをした。
「おい。そこの女。三味線はもういい。こっちに来て酌をしろ。」
巴ははっと驚き動揺したが、すぐに面を伏せて、両脇の芸子に目礼をすると、銚子を手に取って男たちに酌をしだした。
男の中の一人が、自分の顔に目を注いでいるのがわかった。
男は言った。
「こうして近くで見ると、なかなかいい女じゃないか。名はなんという。」
「巴と申します。」
言ってから巴はドキリとした。
男が、巴の着物の袂から手を差し入れてきた。
巴はうつむいて、男の手をじっと我慢している。
と、横に座った男が言った。

「本田殿、その辺にしといたほうが。こいつは客をとる女じゃねぇ。」
「なんだ。俺のすることに水を差すのか。」
「いや・・・こいつはそんな、おとなしい玉じゃねぇですからね。」
と言うなり、いきなり巴の腕を取った。
男はやはり飯塚だった。
飯塚は巴のあごを手でつかんで引き寄せて言った。
「あんたは雪代巴だろう。俺はあんたの旦那と会ったことがあるんだ。あんたはそれを、こそこそかぎまわっているらしいな。」
巴は必死で言った。
「な・・・何をなさいます。」
「俺たちのする事を、幕府に言いつけるつもりなんだろ。そうはいかねぇぜ。」
巴は飯塚の手からぱっと逃れると、三味線を手に取った。
柄のところを巴は勢いよく引き抜いた。
短刀が現れた。
ひぃっ、と横に座った芸子たちが悲鳴をあげた。
巴は護身のために短刀を構えながら、きついまなざしで飯塚たちに言った。
「言いなさい。どうして清里に仕事を頼んだのですか。」

「どうして？そりゃ仕事の口があったからだろ。」
「何か裏があって仕事を持ってきた・・・奉行所の方々はそう申しておりました。あなた、私と奉行所へ行きなさい。」
「は？奉行所に行きなさい？こりゃまた俺に命令ですか。あんた、俺がアッサリそんなところへ行くと思ってんのか。」
巴は飯塚がスラリと腰の刀を抜くのを、肝が冷える思いで眺めていた。
――でも・・・・でも・・・でも・・・・・・！
巴は震える手で刀を握り締めている。
ほかの男たちも、飯塚にならって刀に手をかけた。

と、その時。

ひょう、と何か鋲のようなものが空間に飛んだ。
男の一人の眉間にそれは当たった。
「うおっ。」
思わず男が前にのめり倒れこんだ。
「こっちだ。早く。」

窓の外から声がして、二三人の者が入り込んだのを見た気がしたが、巴は見返す暇もなく命からがら外に駆け出た

巴は短刀を持ったまま、廊下から庭に駆け下りた。

そのままは足袋のまま、外へと駆けた。

茶屋の飯炊き用の裏門を出ると、人気のない小道の先に、一人の老人がちょうちんを持って立っているのが見えた。

蓑笠をかぶり、蓑を着て、その下に丹前が少し見えていた。

「あ、あなたは。」

巴が息せき切って駆け寄ると、その老人は口に細い吹き矢のものを加えて、何か鋭い音のするものを吹いた。

それは、巴を追ってくる男たちの目や鼻に次々と当たった。

追ってきた飯塚たちほか二名の武士が叫んだ。

「てめぇ、何しやがるっ。」

老人は吹き矢を口から離すと、重々至極という調子で言った。

「そこまでにしとくんだな。この女を追い詰めるのが、おまえさん方の役割じゃろう。わしは、女を助ける役割りじゃ。」

飯塚の隣の男がにらみつけて言った。

「聞いてないぞ・・・・。貴様、俺らの邪魔をしようって言うのか。」
「邪魔などはせんよ。これからも幕府の人間を京に送り込んでは、長州などの暗殺者に斬らせるんじゃな。それでおまえさん方の『おあし』が出ることについては、わしは何にも言わん。ただ、この女はここに置いておきなさい。これはおまえさん方が目をかけてはならん女じゃ。」
「じじい、指図をするなっ。」
飯塚は老人に斬り付けた。
だが、老人はポン、と夕陽に飛んで、飯塚の剣を腰の剣で斬り抜けると、何か飯塚たちに向かってふわりと投げた。
「なっ、なんだこれは。」
飯塚は急に手足が自由にならず、闇の中でもがいた。
老人は得意そうに言った。
「ふふふ、昔取った杵柄じゃ。それは拙僧の投げた霞網じゃ。それから抜け出るには、半刻ばかりの時間がいるわい。さ、あんたはわしと一緒に来なさい。いいな。」
と言い、もがいている飯塚に手裏剣を一個ほうって巴に向き直った。
老人の言葉に、巴は声もなくうなずいた。そしてああやはりと思った。昔読本で読んだ者にそのような者がいると聞いたことがあった。母に幼い巴は本から顔をあげて「果心居士とはなんですか？」と聞いた。母は「そういう不思議な人がいたそうですよ。」と言った。そして庭の干し物を広げなが

ら、重ねて言った。「戦国の世には忍者がいたそうです。今の平和なお江戸にはいませんけどね。」と言った。

老人は細い木の板が渡してある、お葉黒どぶ横の掘割を渡りながら、巴に尋ねた。

「まだ走れるかね？」

巴は「はい」と言った。老人はそれを聞くと、巴ににこやかに笑った。

「では走ろう。隅田川の水運から逃げる算段じゃ。行こう。」

と言った。巴はほっとした。しかしその吉原から隅田川まで続く斜めの道を老人について走りながら、逃がしてもらえるのだろうかとも思った。その時、浅草不動院の夕刻を告げる鐘が鳴った。

爪牙（四）

道は平坦であった。しもた屋の家々は静まり、軒を連ねていた。

突然家がまばらになって、葦原がしげっているところに木をつらねただけの船着場があった。

老人は、「そこから乗りなさい」とそこに泊まっている一艘の手漕ぎ舟に巴が乗るようにうながした。

そこへ、思いもかけぬ者が向こうから、吉原の方向から走って来た。

縁であった。

「ねぇちゃん、ねぇちゃーん」

と、誰か小さい者の背に背負われて、あの縁が走ってくるではないか。

巴は思わず涙がこぼれた。努力は報われたのだ。奉行所の「裏」の庭で、あのような者たちの真似事をさせられた自分、「上役」に囲まれて、息が詰まりそうな苦しかったあの毎日。それもみな、この弟のためであった。

縁はその者の背から下ろされ巴の手をひいたが、老人が短く叱責した。「叫ぶでない！早く乗れ」と言った。巴は弟と船に乗った。老人は最後に乗ると、船着場の木を足で蹴って、棹を出した。そしてこぎ始めた。

「蓑をかぶれ！」

老人はこぎながら小声で低く言った。

巴はあわてて弟と船に置いてある荷物の間にある人足用の、数枚置いてある蓑をかぶって息を殺した。船は隅田川の南千住の横の、東に湾曲した場所をのぼりはじめていた。ぎぃーっ、ぎぃーっ、と櫂を漕ぐ音だけが水面にきしんだ。夕闇の隅田川は静かに流れている。巴には短いが長い時間であった。

その同じ隅田川の一角。巴らの乗った舟が出た場所から程近い北東の暗い草原で、死闘が今繰り広げられていた。

葉霞と蒼紫であった。蒼紫はすっかり成長していて、ほとんど大人の男であった。

「やるようになったね。ではこれはどうだい？」

と、葉霞は腰から短剣を引き抜いた。

周りにはやはり女の忍者が数名、蒼紫を取り囲んでいる。

一人は分銅を片手でぐるぐる回している。全員、すさまじい殺気を放って蒼紫に対峙している。対する蒼紫は無言であった。剣を二本、小太刀を手に持っている。狙いどころを探られないようにか、両手とも常にゆっくりと一定の速さで、まるで念仏の舞踊をしているように動かしている。剣先はそ

れにつれて、いろんな方向に動く。蒼紫の目はしかし、その剣先を見ずに前方の葉霞の顔を凝視していた。

葉霞の顔は薄笑いを浮かべている。そしてそれを見ると、あわせたように、右手に持った長い太刀をおなじように動かしはじめた。一見二人とも、相手を誘っているようにも、遊んでいるようにも見える。しかしこれは死闘であった。

葉霞は蒼紫の脇を狙って第一撃を入れた。キン！という軽い音がして、蒼紫の太刀はそれをはねた。手は交差させている。そこへ分銅が飛んだ。蒼紫は後ろにパッとすり足で飛んだ。

「じりじり追いつめてやるよ。そのまま後ろの隅田川に落っこっちまいな。」

と、分銅の女が言った。葉霞はそれを聞くと、少し顔をしかめて脇の女に言った。

「麗月、殺れっ。」

と言った。

「はいっ。」

麗月と呼ばれた女はやはり葉霞と同じように大刀の女であった。蒼紫と葉霞のように剣を動かそうとしている。しかし、少しその動作に緩慢なところがあった。しかし首をひねり、気合いを「えぁっ！」とこめると、蒼紫に向かって突進してきた。蒼紫はその剣をくるりと体を回転させて受け流すと、葉霞に向かって一撃を加えようとした。行過ぎた麗月と呼ばれた女が前にのめって、倒れようとしている。そこへ、鎖鎌が飛んだ。

彼女らは、葉霞配下の女忍である。「霞五人衆」と呼ばれていた。麗月、星月、壮月、霜月、朔月という五人の手錬による女性ばかりの精鋭部隊である。常日頃から、先代――ということにしておこう。この物語の最後ではそうなるだろう。その蒼紫を実質的に育ててきた老人らに対し、反抗的な態度を見せていた。しかし、葉霞はこの先代の配下の一人であった。葉霞らは先代らとそのような複雑な関係なのであった。

蒼紫は先代らの指示で今、この千住河原でこの者らの巴への追撃を阻止しているのであった。蒼紫がこれまでやってきた任務の中では、一番やりがいのある仕事であったであろう。しかし、彼の内心は複雑であった。自分がその、巴という女をそのような境遇に貶めた一端であったということを、彼は考えているのであった。

鎖鎌を使う朔月は、かなりの手錬であった。ほかの四人の動きをこの女はサポートしている。分銅の女、霜月が一番術が弱い。だから、この包囲の網を抜けるとすればそこだ。蒼紫はそう考えた。

巴の乗る舟は隅田川を出航して、すでに遡行をはじめていた。そのまま無事遡行し遂げ、千住大橋から日光街道で悟られぬようにして自分配下の者を使い北に逃がす。実は、蒼紫は先代とは違う「計画」でそう考えているのであった。先代からの指示は、吉原西にある、日光街道を下ったところにある回向院に隠まえということであった。しかし絶対にそうはさせるものかと蒼紫は考えていた。

ついに、彼の中で何かが充填充満爆発し、主客正邪転倒することになったのである。だがこれは、至極当然のことであったのであろう。この夕闇の迫る時刻が、彼の人生の新たなる分かれ目であっ

た。しかしこの計画を失敗した場合、自分は先代に悟られぬように動かねばならぬ。できるだろうか。しかしやってみせねばならない。

蒼紫はあまり、忍びの「腹芸」が得意ではない。だから忍びの内部でも、ただの先代が育てた術専門の忍び人間として扱われている。そして「あれ」が次期御頭に昇進するのかとも陰口をたたかれていたりした。蒼紫はそうした風評を耳にするたびに、自分が人として劣っているような気持ちがして、なんとも言えない気持ちになった。なぜ人間は表裏一体に生きてはいけないのか。しかし蒼紫のいる「忍び」の世界はまさに「それ」であった。

朔月の鎖鎌が蒼紫の進路を絶つように左右に振り子のように動いている。朔月の鎌が蒼紫の膝を狙って入った。蒼紫はまるまって飛び越した。それを見て葉霞はにやりと笑い、瞬間「壮月！」と叫んだ。二本刀の壮月が、着地した瞬間の蒼紫を狙って、第一撃を入れた。蒼紫はそれを受けた。激しい斬り合いになった。

二人とも丁々発止という感じで受けている。だが壮月が押されていた。麗月が言った。「そろそろ殺るかい？」葉霞は楽しそうに言った。「そうだねぇ。」葉霞は剣を構え戦っている蒼紫に狙いを定めた。

葉霞と麗月は蒼紫の背後に回って、同時に激突して剣で串刺しにしようとした。しかしその瞬間、蒼紫の姿はなかった。

葉霞は「なにっ。」と言った。あわてて星月と呼ばれる背の低い女が、印を結んだ。高い澄んだ風

鳴りのような音が風に響いた。いやそれは、その場に居合わせた者だけが聞いた音だったのかも知れない。「う、うるさいっ！」と霜月、鎖分銅の女が片耳に手を当てて叫んだ。「静かにしなっ。まだそのへんにいるはずだ。星月の術で動く音を探すんだよっ。」と葉霞は小声で叱咤し、指示した。葉霞は黒髪の間から、あたりをなめるように見回した。蒼紫の姿はない。星月が印を結んだまま、膝を折り、小さく叫んだ。「蝶！」

五人の女の目に舞い狂う幻覚の蝶が表れた。蝶の動きは錯綜し、夕闇の中で燐粉が燦々と光り、見ていて目まいがするようだった。そのような幻覚術なのである。おそらく、たまたま通りかかった者には見えないかも知れない。いやその者も巻き込まれてしまうかも知れない。人間の脳波をあやつるそれは、それほどの威力であった。

数分たったようであった。葉霞の顔にさすがに焦りの色が見え始めた。葉霞は「だめか。落とせ。」と短く言った。後ろの隅田川の水面が盛り上がった。それはふくれあがり、五人の女を飲み込んだ。水面は沈んだ。水は泥の泥炭地にあふれていって、緩やかになった。「星月の術は見えていたはずだ・・・・・・・しかし逃げたか。早く千住大橋へ！」と、葉霞の意識のような声がした。五人の女たちの姿はそこから忽然と消えていた。

爪牙（五）

巴の乗る舟は、南千住のカーブのあたりにさしかかった。巴は蓑をかぶって弟と舟の中で息を潜めながら、どこかで斬り合いの音を聞いたような気がした。身が縮こまった。この老人は自分をどこかに売るつもりはなさそうだ。しかし、このような世界に身を置いていて、生きた心地がしないのであった。老人の短い言葉では、隅田川から舟を乗り換えて、どこかに逃がしてくれるのだろうと思った。そして遠いどこかで、籍を変えて自分は生きることになるのだろうと思った。思えば幼い頃からそんな予感があった。巴にはそれがつらかった。

舟がカーブから千住大橋に向かって促行を続けているときだった。突然、両岸に泊めてある舟がこちらに向かって動きだした。老人は「むっ、これはいかん。」と小声で言った。しかし努めて舟を静かに操っていた。巴の乗る舟の後ろに、二艘の舟が忍び寄ってきた。いきなり、その菰をかぶったその舟の中から槍がこちらに向かって、ごん、と突き出した。しかし狙いは老人の方ではなく、巴たちのほうであった。狙いはしかし、間一髪ではずれた。老人がそう舟をせわしく櫂で操ったのであった。しばらく槍と巴の乗る舟との格闘が続いた。老人は最後に槍を櫂でたたいた。「その女を置いていけ・・・・。」と声がして、夕闇の中で数人の男が槍の出た舟から立ち上がった。

「この寂庵を見知り置いてほしいの。」

と、老人は言い、櫂を櫓に置き頭に被った笠を河面に放ると、腰の刀を引き抜いた。舟はまだ上流に向かって慣性の法則で流れている。しかし、ここで足止めを食らうと、このままでは千住大橋で絡

め手に捕られてしまう。寂庵は焦った。蒼紫は何をしているのかと思った。
　ばらばらと数人が巴の乗る舟に飛び移った。寂庵はそれを剣でなぎ払い二人ほど水面下に突き落とした。ざんぶと音がして、巴の乗る舟が激しく揺れた。巴は立ち上がろうとした。しかし、寂庵が「今立ってはならん！」と叫んだ。「ねぇちゃん、ねぇちゃん」と縁が巴にしがみついてきた。巴はそれをかばった。水しぶきが激しくあがった。その時、縁の背後から小さな影が空中に飛んで、手裏剣のようなものを続けさまに投げた。
「ばかやろう！さんぴんども全員死刑にしてやるぜ！」
「ばかものっ、騒ぎを大きくするでないっ。猩猩っ。」
　寂庵は死闘を繰広げていた。三艘の舟の間を飛び移りながら、ほとんど軽業師のように敵の男をなで斬りにしていた。次々と男たちは、河底に沈んだ。しかしその騒ぎはもう、千住大橋付近で見えていたようであった。
「猩猩、棹を戻せっ、船を逆手に押し上げるんじゃっ。」
「わかったよ。じいさん、後のやつらを頼むぜ。」
　寂庵は一艘の船に乗っていた狼藉者をすべて川に沈めると、猩猩と呼ばれた小男にすばやく命じた。まだもう一艘の船が追いすがって攻撃をしかけてきていた。カィン！！！寂庵の持つ刀がそれをはねた。男は鎖分銅を投げてよこそうとしていた。男は言った。
「その女はさる場所で必要なのでな・・・・・老人、そろそろ疲れてきたところではないか？」

「バカを言うな。貴様には吹き矢で目潰しでどうじゃ。」
「女を置いていけと親切に言っているのにな。ムッ、ころあいが来たか。」
猩猩はその時叫んだ。
「千住の大橋だ！ねえさん、岸をよく見てな。若御頭が助けに来るぜ。」
橋の欄干が迫っていた。呼ばれて巴は、この漕ぎ手は、ずいぶん小男なのに巧みに櫂を操っていると思った。
その時岸に人影が数人動くのが感じられた。
「若御頭！」
その猩猩の叫ぶ頭をかすめて、その数名は楔を放っていた。
「ううっ。」
先ほど分銅を投げようとしていた男たちは、顔に楔が突き刺さって、次々ともんどりうって川面に落ちた。
「へへっ、さんぴんおととい来いってんだ。な、火男？」
「べしみ、おれも行くぜ！」
火男と呼ばれた太った男がよたよたとこちらに向かってくるのを、さっと前に出た般若の面の男がさえぎった。
「しっ、早くしろ、おい、女と子供。こちらの岸に向かって早く飛び移れ。」

巴はその般若の面にぎょっとしたが、もはや言う通りにするよりほかないので、般若が手をあおぐのに「はい。」と鷹揚にうなずいた。
そして縁の手を引いて船から跳ぼうとした、その時であった。

「その娘と子供の命はあずかるぜ！」

橋の上でだれかがしゃべって、こちらに紐のようなものを投げるのが見えた。
「まずい！」
誰かが一声、鋭く叫んだ。巴ははっ、として手を空に伸ばした時、誰かに抱えられて自分が向こう岸に降り立っているのがわかった。
どうやら橋の欄干の下部にひそんで巴らを待っていたようなのである。
しかし。
「縁！縁！」
巴は思わず絶叫した。
「ねえちゃん！」
縁の左足にその紐のようなものはすばやくからまって、男はそれをさっと橋の上まで手繰り寄せた。まるで手品を見るかのようであった。

そして縁が大橋の上に立っている片目の男に抱きかかえられて、橋の上をあっという間に北の方角に向かって遠ざかっていくのが見えたのだった。

縁が奪われたのだ。

「なんたる失態。」

寂庵が目をいからせてつぶやいた。しかし欄干の男の投げた紐による攻撃はあまりにもすばやく、防ぐことは無理なことであった。巴が逃れたのは間一髪というよりほかない。

「般若、女を頼む。」

巴を抱えて岸に降り立ったのは、巴の知らない蒼紫その人であった。蒼紫は巴を岸に立たせると、縁の奪われた方角へ行こうとした。

しかし、寂庵がそれを止めた。

「待て。今は追わぬほうがよい。あの者らは、役に立たなければあの子供の命を奪って、すぐに路傍に放り出す。子供の命はあの者らに預けるよりほかない。」

「何かに使うというのか。」

「だからその女と交換とか何か言ってくるのを待つのじゃな。でなければ、女の握っている証拠品との交換じゃ。」

巴は必死で言い募った。

「あの、私が何か持っているというのですか。」

寂庵は重ねて穏やかに言った。

「まあそんな昔のものは今では持っておらぬと思っているが、見た者もいるのでな。とりあえずあんたは小石川の療養所で安息すればよかろう。蒼紫、そこまで連れて行ってやりなさい。」

「はい。」

蒼紫はそれだけ答えた。

巴は思わずまじまじと蒼紫の顔を見た。それはたいそう綺麗な人だった。巴はそう思った。しかし――――。

先ほど夕闇の中で戦っていた音は、この者だったのかも知れない。

彼等は皆濃い藍色の忍び服を着ていた。それは明らかに日常の者のいでたちではなかった。巴はやはり恐ろしいと思い、あわてて目を伏せるようにした。

「では、参りましょう。」

若御頭と呼ばれた蒼紫がそれから黙っているので、横合いからにこやかに猩猩が言った。巴は静かにうなずいた。

彼等は巴について何かを知っているのであり、だからあの吉原にまで巴を助けに現れたのだ。それが何かは、まだ巴は知らなかった。

爪牙（六）

小石川の療養所は、隅田川からかなりの距離があった。途中、自分はどうしてこの者たちと一緒に歩かなければならないのだろう、縁はどうしたのだろうと、巴は不安に思った。しかし、奉行所に帰るのは、縁を取り戻すのに得策とは思えなかった。町並みの真ん中に江戸城の天守閣が見えてきた。小石川からは見えるのだった。巴はそのころにはこの者らは、おそらく御庭番衆ではないかと検討をつけていた。

――私の持っているもの・・・・あの小石の入った袋・・・・父と母の形見の品ではないか。

巴はそれも思い当たった。どうしても持っていなくてはならない、人前に出してはならない、と固く母から言い渡された、小さなぼち袋に入ったそれは、緑色の不思議な石であり、暗がりに置くと自然に発光する石だった。ただその色はあまりにもどぎつい緑色なので、巴はあまり好きではなかった。なぜこんなにもこの石は光るのか。巴はいつもそう思った。見るたびに不吉な感じを受けて、父が海の向こうに行ってしまい、母が病死してしまったのも、みんなこの石のせいではないかと巴は思ったりもするのだった。

療養所について、寺のような建物にかくまわれた巴は、彼等御庭番衆たちに布団に横になるように

勧められた。巴は疲れていたので、布団に入ったが、自分ばかりが縁を置いて休むのが悲しくなり、枕を涙で濡らした。御庭番衆の者達は、すぐに退出し、巴が泣いているのに気づいた者はいなかった。

ただ、部屋の上がりかまちでこのような会話が交わされていた。

「蒼紫、どうして回光院に連れて来なかったのだ？幕府の役人が待ち構えていたのに。」

「手間取りまして。弟を拉致されました。女も怪我を負い、疲れております。」

「なるほどな。それは失態というわけだ。しかしわしの命令を勝手に変えるとは何事じゃ。上様にご報告したい事柄があったのに、これではまた一から振り出しに戻りそうじゃ。女の身のあらためは明日にでもするとしよう。」

老人と蒼紫の短い会話――それは、すぐに廊下を歩いていく足音とともに遠ざかった。

――寂庵さんではないわ。誰だろう？あの声は・・・・・。

それが、先代御頭と呼ばれる人物の声だと知ったのは、巴はもっと後のことであった。

――縁、無事でいて・・・・お願い・・・・・！

巴はただ今は、一人で泣くよりほかなかった。

挽歌（一）

巴が小早川の療養所に世話になっていた頃。

縁は、千住の近くの古寺の境内にある松の樹の幹に、縄でくくりつけられていた。彼をさらって来たのは、油櫛蝋外（あぶらぐしろうがい）と言い、片目の男である。今、その横にはあの、蒼紫と戦った女忍者の葉霞と、あともう一人、酒禍上朱膳（さかがみしゅぜん）という男がいた。総髪の背の高い男で、長い大刀を腰に挿していた。

縁は泣き叫んでいた。

「はなせーっ、はなせーっ、この野郎！はなしやがれーっ」

「よくしゃべる小僧だな。」

朱膳は、うんざりした調子で葉霞に言った。

葉霞は、腰の刀を引き抜き、縁の頬にぺたりと押し付けた。

縁は刀にびくりとし、静かになった。

葉霞は面白そうに言った。

「ねえさんを取り戻したいかい？」

「おまえらが、ここに連れてこなければ、俺はねえちゃんと・・・。」

「はっ、そう思うだろうねぇ。いいかい、私たちはおまえのためを思って、ここに連れてきたんだよ？」

縁は言った。

「だったらこの縄を解けよ！なんでおまえら、俺を縛るんだよ。」

「仕方がないだろう？そうでないと、おまえは逃げてしまうからね。いいかい。ねえさんは、幕府に狙われているんだ。あたしたちは、それを阻止するべく立ち回っているんだよ？ま、おまえに言ってもわからないだろうがね。」

葉霞はそう言うと、忍者服の中から小さい緑の光る破片を取り出した。

「おまえはこれを見たことはないかい？」

縁は目をぱちくりさせた。やはり子供である、誘導尋問を受けているとは思っていない。尋ねられるまま縁は口にした。

「ねえちゃんの持っていた石と似てるな・・・。なんだそんなもん。」

「おまえのねえさんは、これを持っているんだね。それだけ聞けば十分さ。ま、油櫛さまが、おまえしかさらえなかったのは、残念至極と言ったところかね。」

油櫛は言った。

「おいおい。俺が来なけりゃこのふたりはそのまま、幕府の役人に面通しされているところだったんだぜ。」

「それは困るからね・・・・。そこはダンナの働きがあってこそ。ただ、女を連れてこられなかったのは、本当に残念だ。」

それまで黙って聞いていた、朱膳が横合いから言った。
「それはしまっておけ。大切なかけらだ。藩のやつらがそのような品を隠れて作っていたという証拠の品だからな？」
「そうね。」
葉霞はそう言うと、石を元通りのところにしまった。
油櫛は縁に言った。
「小僧、何か剣を使えるのか？」
縁は答えた。
「す、少しなら・・・・。」
「だったら、幕府の役人どもからねえさんを盗みだせ。今おまえのねえさんは、御庭番衆に囲われている。」
「御庭番衆？」
「幕府直属の忍者集団だ。」
「おまえはちがうのか？」
「ちがうとも。ま、関係はしているがな。では縄を切ってやる代わりに、俺たちの言うことを聞け。悪いようにはせん。」
縁は迷った。この者たちの気配には邪悪なものを感じる・・・・しかし、姉の巴の消息は、この者

らに尋ねるほかないそうだ。しかも姉の持つ石が関係しているのだという。縁は答えた。
「わかった・・・・・俺、おまえらの言うことを聞く。ただし、ねえちゃんをどうこうしようっていうんなら、貴様たちを容赦しないぞ。」
「ははは、威勢がいいことだな。」
縁は自分が完全に子供扱いされていると思った。しかし、朱膳らは縄を切ってくれた。
「さて・・・・・おまえ、連絡係はできるかい？剣は使えないようだが。」
葉霞はにやりと笑って言った。
縁は答えた。
「うん。」
「じゃあしばらくは、この寺にいな。そのうち、用があるならおまえを呼び出す。勝手に逃げようなんて算段はしないことだね。麗月。」
葉霞が呼ぶと、松の上からひらりと黒い影が降り立った。
「お呼びですか。」
縁の前に、忍び装束の女が一人立っていた。
「おまえ、この小僧の見張りを頼むよ。私たちは、ちょいと野暮用があるんでね。」
「承知しました。」
葉霞、油櫛、朱膳の三人は、縁からはなれて寺の山門から出て行った。

縁は自分も出て行こうとしたが、すぐに麗月の手裏剣にさえぎられた。
麗月は言った。
「ぼうず、おとなしくしていないと命の補償はないよ?」
縁は唇をかみ締め、麗月に従って寺の建物の中に入った。

挽歌（二）

そのころ、巴は小早川から江戸城近くの御庭番衆の番舎のほうに居を移されていた。小さな中庭がある、小ぢんまりとした邸宅である。真ん中に何部屋かの道場と茶室を備えている。巴はそこの、奥の間に通されていたが、縁についての質問には誰一人として答える者はなかった。ただ、彼女を救出した般若やべしみ、猩猩たちとは、剣の練習をするように言い付かったので、打ち合いの練習はしている。蒼紫は姿を見せなかった。そして、あの声の老人も同様だ。ただ、寂庵は巴の身を心配してくれていた。今日も稽古場に彼は来ていた。しかし寂庵は稽古はつけなかった。自分があれほどの手錬であるのを、寂庵はどうもいいものと思ってはいないようなのだった。巴の稽古についても、眉をひそめた顔で見物していた。

「寂庵さん。」

巴は着物の袂を直しながら、見ている寂庵に言った。

「寂庵さんは、稽古はつけてくださらないのですか？」

「ああ・・・・あんたはそこそこ腕が立つからな。それより・・・・。〇〇藩にいたという話は本当かね？」

「ええ・・・・江戸に来る前にはその藩にいました。父は瑠璃把ガラスの職人の仕事をしていました。」

「そのガラスの破片か。あんた、それは大切にしまっておいたほうがいい。」

「はい。」
巴は本当は縁の消息を知りたいのである。じりじりと焦がれるようなその思いがあるのを、じっと耐えて御庭番衆の言うままに道場で修練に励んでいるのだった。きっとなんとかしてくれるはずだ、と巴は思っている。私を救いに来た人たちなのだからというのが、その理由なのだが。
寂庵は道場の板敷きのへりに座って言った。巴もそこに腰をおろした。寂庵は尋ねた。
「婚約者の清里明良とは、そのころからの幼馴染かね？」
「はい・・・・彼とは江戸に来た時に知り合いました。いい人でした。」
「いい人か・・・・。で、あんたはその仇を討とうとしている。」
「違います。私は幕府の役人に言われて・・・・奉行所の方たちでしたが。偵察を働くように言われたのです。」
「うん。じゃがこの御庭番衆の御頭も、あんたを勘定方に突き出すつもりでいたんじゃよ。」
「どうして今は、この館に？」
「その、石じゃな。あんたは持ってないことになっとる。わしがそう言えと蒼紫に言った。」
「蒼紫？」
「若頭じゃよ。あんたはそんな石は持っていないことになっとる。」
巴はびっくりした。
「では、絶対に私はこれを持っていることを、誰にも見せてはならないのですね？」

「そうじゃな。そうしないといけないじゃろう。」
寂庵はそういうと、目をしばたかせた。
「その石は自然に光るのじゃろう？」
「はい。仕組みについては知りませんが・・・。」
寂庵は大きくため息をついた。
「それをアメリカに輸出しようとしたやつがおるんじゃ。失敗したがの。そのガラスを吹きガラスで作る際には、鉱毒が体内にたまるんじゃよ。恐ろしい光じゃ。それで精錬所は荒れた。最後には放棄され、関係者は放逐された。あんたのオヤジさんはその一人じゃよ、おそらくな。」
巴は目を丸くした。
「そんなことをどうしてあなたさまが？」
「わしは幕府の蘭学所に勤めていたこともあるんじゃよ。そこでも研究されていた・・・・洋物の事物でらんぷがあるじゃろう？あの代わりにならんかと言うてな・・・・・。」
「はい。」
それは巴にもかすかに思うことがあった。いなくなった父の研究。母は、自分を連れて雪山の峠を越えていった。幼い頃のその記憶――――。
「それで父は・・・・海の向こうに旅立ったのでしょうか・・・・。」
巴はやっとのことでそれだけ言った。寂庵は答えた。

「いなくなったあなたの父親の消息か。それは残念ながら、わしにはわからん。ただ・・・・あんたのことだが、それが関係して今この屋敷にかくまうことにしている。いずれあんたは、東北にでも弟と旅立たせるつもりじゃ。」

巴ははっとしたが、勤めて冷静に言った。

「北に逃げるのですか。」

「そうじゃな。芭蕉のたどった道じゃ。あんたには気の毒じゃが・・・・・。その〇〇藩がそのガラスを作っていたという確証が幕府は欲しいんじゃよ。ご禁制の品じゃからな。そして、幕府もその研究を再開したいと思っている。欧米に高く売れるのが、先ほどの黒船の騒ぎでわかったからな。あちらの国ではそのガラス製品の愛好家が結構いるそうなんじゃ。だから、あんたのその破片だけでも、幕府には重要なものなのじゃよ。」

「そうですか・・・。」

と、そこへ式尉がやって来た。

「おお、式尉、おまえも一言言ってやりなさい。おまえが薩摩藩からこの御庭番衆になったいきさつじゃろ。」

式尉は鷹揚に答えた。

「ああ・・・・・あの幕府ご禁制のガラス食器ですね。」

「そうじゃ。薩摩切子のガラスというと、薩摩藩の独檀場だからのう。おまえさんもそれを探るた

めに、江戸城に忍びこんだんじゃろう。薩摩藩では密貿易で、たくさんガラスを輸出していたからの。」

「ええ、そうです。若頭に倒された時もそれをさぐっていたんです。あんたもその縁者だから、若頭に助けるように言われたんで、あの場にいたんですよ。」

巴はやっと光明が見えてきた気がした。

ただ、ひとつ気になることがあった。

「夫になるはずだった清里ですけど・・・・まさかそれに関係して京で斬られたのでしょうか。」

「それはわからんよ。」

寂庵は言った。

「ただおまえさん、その破片を持っていて、しかも清里殿の仇という負い目があるのを、幕府が見過ごすとは思えん。あんたに何かをやらせるかも知れん。わしたちは、それを阻止したいのじゃ。あんたには自由にこの地から離れてほしいんじゃ。」

「お話、わかります。私もそうしたいのです。ですから、弟の消息を早く――。」

巴がそう言った時だった。

挽歌　（三）

「そのガラス石だが。俺に預からせてくれないか。」

声に巴ははっとした。蒼紫がいつの間にか、彼等の座っている板敷きの隅に立っていた。巴は蒼紫に会って以来、その顔を見るとドキリすることが多かった。彼は、思いたくないが背格好や顔立ちが亡くなった清里に少し似ているのである。清里よりも頭ひとつ高いのが蒼紫であった。そして、清里は蒼紫ほど陰気で美形な青年ではなかった。

――不埒な・・・・。

巴はそんな自分を、心の中で責めていた。ただ、蒼紫に橋げたの下で助けてもらったことは、今でもはっきりと巴は覚えている。まさに巴からすれば神業のようであった。橋の上の男の投げた縄は、縁だけでなく巴にも巻きつこうとしていたのである。その一瞬の間隙を抜いて、蒼紫は巴をさらったのである。蒼紫の失態とこの寂庵は憤ったが、巴にしてみれば、それだけの働きをしてくれた蒼紫という人は、命の恩人に間違いなかったのである。

巴は少し頬を赤らめながら、蒼紫に石の入ったぽち袋を胸から出して差し出した。藍色の布地に、刺し子で花の模様が細かく入っている。口には赤い縄編みの紐と鈴がひとふりついていた。どこから見ても、ただの子供のお守りのようなものであったが、蒼紫は一瞬目を見張るようにした。彼はその何の変哲もない袋に、何か見覚えがあったようなのである。しかし蒼紫は無言で受け取った。中を蒼

紫はあらためた。緑のガラスの破片が出てきた。
蒼紫は日にかざしてみたが、昼間の光では発光などしない。可憐な小さな葡萄の房が、文様で浮き上がっていた。何かの瓶の破片のようであった。
さらに袋を振ってみると、中から鉄錆びの浮いた鍵がひとつ出てきた。
「葡萄の模様か。海外への輸出品かのう。それとその鍵は、大切なものみたいじゃの。」
寂庵が横あいから言った。
「奉行所ではこれのことは聞かれなかったそうじゃな。」
「はい。たぶん、知らなかったのだと思います。」
「うむ。ま、そうかも知れんがな。やつらの腹の底はわからんからな。」
寂庵はそううなった。蒼紫は冷静に言った。
「たぶん研究した書類入れなどの鍵だろう。持っているだけでも危ないものだ。」
蒼紫はそう答えると、それを服の中にしまった。
「確かに預かっておく。」
「はい。」
「いずれ必ずあなたに返す。今は危険だ。」
蒼紫はそう言うと、向こうに行ってしまった。
巴は口の中で「あ」と言ったが、元来声の小さい巴の声は、蒼紫には聞えなかったようだ。

「あの方が若頭・・・・というのですか。」
巴はしばらくして寂庵に聞くと、寂庵は顔をほころばせた。
「名を四乃森蒼紫と言うてな、少々暗い男じゃが、あれは誠実な男じゃ。心配めさるな。ここにいる、若頭付きの下働きは、みんなあの男の味方じゃよ。」
「そう・・・・ですか。」
巴は少しはにかんだ表情になった。蒼紫と自分をつなぐものができたのが、彼女はうれしかったのである。
――清里の時はこんな風に思ったことはなかったのに。遺品のかんざしをもらった時も・・・・。
そう思うと、自分の心の動きが巴はよくないと思うのだった。あの遺品をもらった時、どうしてうれしいと顔に出さなかったのだろう。ただ、「ありがとうございます」と目を丸くだけしたのだろう。
――それは、私が清里を愛していなかったから。
と思うのが、巴はとてもつらい。もしそうだとすれば、自分は人非人だと思う。自分が冷たい心の持ち主だと思うのが悲しい。しかし、巴の心は波立たなかったのは事実だった。そして、今蒼紫には心がざざなみ立つのであった。
寂庵はそうした巴の気持ちがわかるのか、一句芭蕉の句を読み上げた。
「『かさねとは　八重撫子の名なるべし』　――じゃな。おっとこれは弟子の曾良の句じゃ。芭蕉

は――『しばらくは　滝にこもるや　夏の初め』　――じゃな。あんたもしばらくはここで休んでおりなさい。上のほうの騒動が静まってから、弟と一緒にこっそり旅に出ればいい。これも宿世の縁と思ってな。」

「はい・・・。」

巴は寂庵の心遣いが身にしみてうれしいと思った。

挽歌（四）

巴はその夜、床についていた。なかなかその夜は寝付かれなかった。寂庵の言った父の仕事、そして母の形見を蒼紫に預けてしまったこと・・・・・それらが巴の心をちりちりと焦がし、揺さぶり続けた。やはり蒼紫に渡すべきではなかったのではないか?自分は軽はずみなことをしてしまったのではないか・・・・・。いや、蒼紫は信用できる人物なのだ。しかしそれは考えてみれば、寂庵から言われたセリフだけにすぎない。

不安から巴は起き上がった。巴は体はあまり丈夫なほうではなく、よく生理痛に苦しめられることがあった。その日はたまたま、その日であった。夜中に布団から起き上がり、手許の燭台に火をつけると、巴は武家屋敷の廊下を静かに歩き出した。庭が見渡せる廊下まで出たときだった。

「ねぇちゃん、ねぇちゃん。」

庭の木々の間から、縁のかぼそい声がした。あやうく燭台を巴は取り落とすところだった。

「縁!どうしてここが?」

縁が駆け寄ってくるのを、巴は抱きとめた。

縁はうれしそうに言った。

「もう大丈夫だよ。俺があいつらに言ったんだ。ねえちゃんは、証拠の品を持ってるって。それで

出るところへ出れば、ねぇちゃんと婚約したから清里さんが殺されたというのは嘘だって、奉行所に言えば納得してくれるって――。」

「縁・・・・。こちらへ来なさい。」

巴はあわてて、縁を廊下の隅へと導いた。

そこで巴は諭すように言った。

「あなたは敵の手から逃げてきたんでしょう?あの人たちは悪い人だと思うの。」

「だって、そう言ったんだぜ、その、葉霞さんが・・・・・。」

「葉霞さん?」

「そうだよ。すごく強い女忍者さ。なんでも知っているんだよ。その人がそう言ったんだ。葉霞さんは、こっちの御頭に率いられたやつらのことも知っていてさ。若頭の蒼紫って野郎がねぇちゃんを以前に見ていたことがあるって言ったんだ。ねぇちゃんは、そいつに以前から狙われていて、今だまされてるよ。」

「どういうことなの?」

「葉霞さんは、その、若頭と寝たことがあるって言ってた・・・・どういう意味かな?俺よくわかんないけど・・・・。知ってるって。」

「縁、黙りなさい。」

巴はそこまで聞くと、縁に厳しく言った。

「蒼紫さんたちは、いい人たちです。あなたも助けようとしていたのですよ。」
縁は駄々っ子のように言い返した。
「そんなはずねぇよ！ねぇちゃんが、奉行所の命令で吉原で働いていたのを、邪魔しに来たんじゃねぇか。」
「縁、そうではなかったでしょう。一体あなたは何を言ってるの？」
巴は唇をかんだ。縁はどうやら、葉霞という名前の女忍者に手なずけられたみたいなのだ。しかも縁の話では、その葉霞という女は蒼紫とそういう仲みたいなのだ。巴はふらり、と目がくらんだ。何故蒼紫を信じようと思ったのだろう、と思った。しかもガラス石は今、蒼紫の手にある。巴は念のために尋ねた。
「縁、証拠の品というのは、その、緑色の光るガラスのことですか？」
「うん、そうだよ。それさえあれば、許してもらえるって。」
「今、私の手許にはありません。」
「ええっ、なんでだよ。」
「蒼紫さまに預けました。」
「えっ・・・・・なんだって？なんでそんなやつに渡したんだよ。あれかあさんたちの形見なんだぞ！」
「わかってる・・・・わかってるわ縁。でも、これには事情があるの。」

と、そこまで巴が言ったときだった。

「女、説明ご苦労さまだな。私たちと一緒に来てもらおうか。」

と、声がして、黒い影が数名庭に降り立った。

笹葉霞の配下の者たちだった。そしてその中心に、葉霞が立っていた。

「上役の頭の固い連中を、説得するのには骨が折れたよ。あんたさえこちらの物になればいいのにさ。この・・・私の持っているガラスの破片と対になっているあんたの物、それが必要なだけさ。」

巴は目を見張った。女は漆黒の長い髪をしていて、冷ややかな光を目に宿していた。

「あなたが、葉霞・・・・・。」

「そうだよ。あんた、婚約者が死んだのはみんなあんたのせいさ。ま、長州の男に斬らせたんだがね。幕府が。」

「そんな！」

「まわりくどいやり方をするのが幕府のお役人たち・・・・あんたも覚えておくんだね！さあ、こちらに来るんだよ。弟の命が惜しければ・・・・。あんた自身の命もだ。」

巴は縁をかばうようにして、縁におおいかぶさった。

「弟と私をどうする気なのです？」

葉霞は笑って言った。

「出るところに出たら、後は用済み・・・。というか、あんたたちがそのままで生きていたら困るのさ・・・・・〇〇藩と幕府がその、裏で協力して光るガラスを作っていたとわかれば、薩摩がだまってはいないのさ。倒幕のための証拠品がひとつそろうことになるんだからねぇ・・・・。そうだろう、朱膳のダンナ？」

「ああそうだな。」

今度は木陰から、一人背の高い男が出てきた。手には長刀を手にしている。葉霞は朱膳に言った。

「まだ殺すんじゃないよ。縁、ねえさんをうまくおびきだしたじゃないか。誉めてやるよ。ま、その働きさえあれば、私たちとうまくやっていけるかねぇ。女、素直になるんだ。」

巴は叫んだ。

「いっ、嫌です。あなたたちには絶対に渡しませんから。そのガラス石を使って、また悪事を働くんでしょう？」

葉霞は答えた。

「悪事だって？私たちは、あんたたちを幕府の追及から救ってやろうとしているのがわかんないのかい？」

「まったくバカな女だ。」

横に立つ朱膳も笑って言った。しかし巴にはわかっていた。この者らにあの石を渡せば、寂庵の言

うように、この危険なガラスを誰かが製造するのを再開するはずなのである。それはいけないと巴にはわかっていた。その話をしたときの寂庵は本当につらそうであった。また、蒼紫も「危険だ」と言ったのはそれに違いなかったのである。

――でも、大丈夫。私はどうなっても、あのガラス石は蒼紫様が持っておられます。

巴はそう思った。

「弟を返していただきます！」

巴はそう一声言うと、縁の手を引いて屋内へとだっ、と駆け出した。

「ちっ、追うんだっ。この屋敷の中を、あたしたちが知らないとお思いかい？」

葉霞はそうどなると、腰の刀を引き抜いた。しかしその瞬間――。

苦無が三連、葉霞の頬の横すれすれに飛んで木の幹につき立った。

「――蒼紫っ。」

葉霞は叫んだ。

「そこかいっ。」

葉霞はあやうく剣を交差させた。蒼紫が二刀を手に向かってきたのだった。

「やはりあの女が大事なのかいっ。」

激しい斬り合いが起こった。その間にも葉霞の手下の麗月たちが、屋敷の中に入っていく。そこへ蒼紫側の般若と式尉たちが、それぞれの武器で立ちはだかった。

「べしみに猩猩、巴と弟を確保しろ。」
蒼紫が葉霞と渡り合いながら、べしみに言った。
「ひぇっ、わかりましてでござる。」
あわてて答えたべしみと猩猩は屋敷の奥の襖を蹴破った。巴たちはその間、座敷の中庭の隅に息をひそんで隠れていた。
「あそこだ！」
猩猩が言うより先に、葉霞の手下の者の三人が巴たちを取り囲んだ。
「さて、女ども、私がその女に引導でも渡してやるかな。」
剣を抜いた朱膳が、女たちの輪の中心にいる巴に近づいていた。朱膳は言った。
「圧倒的不利じゃないか。割り印の鉱石は持っているんだろうな、女?」
巴は縁を抱きかかえて守りながら、朱膳に答えた。
「知りません。あなたに渡す物は、わたくしにはありません。」
「ほう。殊勝な物言いだ。〇〇藩の幕府よりの朱印状を隠している金庫の鍵、貴様は持っているはずだが・・・・。」
「・・・・・・・・・。」
巴は無言で相手を見ている。庭のほうで蒼紫が葉霞と渡り合っている。わたしも何かしなければ、と巴は思うのだが、縁を守ってかばっている今、それは不可能である。このまま私はこの男に斬られ

るのだろうか――。でも縁を守れば本望だ。巴はそう思った。――その時。

挽歌（五）

「貴様ら、我が屋敷を何と心得る。やりたい放題、許すべきものにあらず――。」

巴ははっとなった。老人の声だった。しかし、その声は冷たいものであった。次の瞬間、朱膳の体は巴の前からぱっと後ずさった。

あやういところで、朱膳は老人の高速で走る剣から、からくも退いたのである。葉霞もはっとなった。

「御庭番衆御頭っ。まさか。」

蒼紫と斬り合いをしていたところを、葉霞も退いた。老人は言った。

「そのまさかじゃ。その方ら、神妙にいたせ。さて蒼紫、お前のその様はなんじゃ。これはどうしたことかな。」

老人は黒衣の忍び服から巴の香袋を取り出した。巴は驚いた。蒼紫に渡したはずのものは、この御庭番衆御頭と呼ばれる老人の手に、何時の間にか渡っていたのだった。

「貴様らこれが欲しいのであろう。渡さぬ。今は見逃してやる。去れ。」

御頭の老人はそう言った。蒼紫は目を見張った。

――「去れ」、だと。

それは断じて受け入れられない命令であった。蒼紫はこの、葉霞たちの攻撃については予測していたし、彼等を一網打尽にするつもりで屋敷の中で潜伏し篭城していたつもりだったのである。しかし

先代と後ほど呼ばれたこの老人は、何もかも蒼紫の予定を今覆してしまったのだ。
蒼紫が見ているが早いか、葉霞たちは老人の指揮で殺到してくる御庭番衆の雑兵らを尻目に、屋敷からさっと逃げ出した。
「老人、甘いな。」
とだけ、葉霞は言ったが、それも彼女の口元を隠したマスクにさえぎられて、聞えるか聞えないかの声であった。
蒼紫は震える思いでそこに立っていた。しくじったのである。明白に自分はしくじったのだ。それは己にとっても恥であったし、巴にその様を見られているのも恥であった。
老人は葉霞らが去るのを見届けると、蒼紫に向き合って言った。
「さて・・・・蒼紫。貴様には言いたいことがわしにはたくさんあるのだが・・・・その女を見張れと言ったわしの言葉も貴様には伝わらなかったようじゃな。この石はしかし、今貴様に渡す。」
「御頭！」
と、老人の脇にいる忍びの男が声を荒げた。しかし老人は続けて言った。
「わしが貴様に命じてやる。貴様にとっては喜ばしいことであろうな。やつらのアジトを突き止めた。中山道にある山の峰にある。そこまでその女とともに、やつらを追え。そして証拠の品を持って帰れ。貴様の部下をつけてやる。万が一にもしくじった時には貴様の命はないものと思え。雪代巴。」

巴は呼ばれてこわばった。
「は・・・・はい・・・・・。」
「貴様は蒼紫とともに行くのじゃ。元はといえば、貴様の父が犯した誤りじゃからな。その責任を取ってもらう。」
巴はこの時、その道中がどういうものであるかは想像できなかったので、蒼紫とともに行くことができるのはかえって僥倖であると思った。それでどきりとしながらも、顔は平静に保って答えた。
「はい。」
巴が気丈に答えたのにも、老人は何も思わなかったようだ。
――この方のお心は、目には読めない・・・・・。
巴はそう思った。冷たい感情の読めない灰色の目であった。老人は言った。
「支度をしろ。明朝にはこの屋敷を立て。宿はかねての手はずのところに取れ。連中は貴様らの邪魔をするだろうが、おいおい倒していくのじゃな。では。」
老人はそう告げると、忍びの者らに「解散」と告げ、奥の間に消えた。
蒼紫らの組の者は老人たちが消えると、寄り集まった。般若は蒼紫に向かって言った。
「若！これははめられましたぞ。」
般若は言った。
「我々のことは、邪魔になったのです。だから、我々だけで街道を下るように言われた。これは罠

です。」
蒼紫は答えた。
「言うな般若。行くしかあるまい。」
「その女子供も連れてですか？大変な旅になりますぞ。」
「もとより承知だ。」
「この屋敷でやつらを討ち取って、その姉弟を逃がす手はずが・・・・。」
「弟が今こちら側にあるだけ、運があったのだ。そう思うしかない。」
「若・・・・・。」
般若と蒼紫の会話を聞いて不安になった巴たちに、寂庵が声をかけた。
「なに、うまくいけばおまえさんがたは、途中で逃げればいいんじゃ。そうなるよ、きっとな。」
巴は無言でうなずいたが、それはできないこととも思っていた。
父の話、あの鉱石の話を聞かされた今、自分は責任を取らなければならないと彼女は気丈にも思い込んでいたのである。
そして、縁は黙っていたが、この場のやりとりを聞いて、何故姉はここから逃げ出さないのであろうかと思い、幼いながらもその不満心を心に渦巻かせていた。彼にとっては姉が蒼紫の言うことを唯諾々と聞いている理由は、「それ」しか思い当たらなかった。姉は、どうやらこの蒼紫という男がたいそう気になっている様子なのである。

――今だってまた失敗しやがったのに。こんなやつ。
と、縁は思っていた。だいたい今も、あのいかめしい老人に、鉱石の袋を掏り取られていたのだ。
――間抜け。それにこの寂庵さんて年寄りも、調子のいいことしか言わないじゃないか。
縁はそう思った。そして、蒼紫らと一緒に行くのはご免だと思ったのだった。
しかし縁はそれらのことを見誤っていたのである。
寂庵は巴らを寝床に促したあと、血のりの落ちた月の照らす部屋を見ながらぽつりと一人ごちた。
「無残やな、兜の下のきりぎりす・・・。蒼紫殿、こたびの旅はあなたにとって、その生涯を決める旅になるやも知れん・・・・。」
寂庵はもちろん、彼等の旅に先代の追っ手と監視がつくことを考えていた。そして、蒼紫の胸の内も、彼にはわかっていたのである。

道行（一）

蒼紫はまだ年若いいでたちで、ある山の峠近くの薄暗い小屋の中で、先代と後に呼ばれることになる老人と囲炉裏の火にあたっている。外は吹雪である。不意に、小屋の戸が風ではなく、はたはたと鳴った。

「あけてあげなさい。」と、先代が言うのに、蒼紫は戸のつっかい棒をはずした。

粉雪の風とともに、二人の親子連れが小屋の中に入ってきた。

菅傘をかぶった、旅装束の母親と娘だ。ひどく疲れている様子だった。蒼紫は戸をすぐに閉めた。

「火のそばに来なさい。」と、先代は二人に言った。

「はい。お世話になります。」

母親は頭を下げた。傘をはずしたところを見ると、品のある顔立ちの婦人と娘だった。

蒼紫はその様を見て、武家の出であろうと検討をつけた。しかし、華美とは程遠い装いの二人だった。下級武士の家の者なのだろう。先代は言った。

「その子はだいぶ疲れているようだ。蒼紫、水を飲ませてあげなさい。」

蒼紫はうなずくと、腰にぶらさげた竹筒の口をはずして、娘にさしかけた。

母親は「すみません」と言うと、筒を取って娘の口元に持っていった。

しかし娘はごほごほと咳き込んで、水を飲もうとしない。先代は蒼紫に命じた。

「熱があるようだ。丸薬を。」

「はい。」
蒼紫は今度はふところの丸薬の入った袋から、熱さましの薬を取り出して母親に渡した。母親はまた頭を下げた。
「まあ、すみません。こんなにもお世話をしていただいて。」
先代は目を細めた。
「何事でもありませぬ。それより、みどもは脱藩ですか。」
母親ははっ、と顔を青ざめさせて言った。
「いえ、違います。私どもはこれから江戸に帰る途中でございます。」
蒼紫はその頃は江戸から離れていたので、江戸に帰るこの親子を懐かしく思った。
そして熱があるらしい娘の様子をうかがった。
黒髪をぱつんと切った顔はたいそう愛らしい娘だった。蒼紫がその頃見たどの娘よりも色が白い。そして、蒼紫のほうを見て「ありがとう・・・・。」と一言返事をしたそのさまは、本当にかわいいものだった。
しかし、自分はこの娘のことを忘れてしまうのだろうな、と思った。
と、その時――――娘が母親の手を引いて言った。
「あのガラスの細工を、父さまによく見せてあげてください・・・・。」
「ここにおられる方は、父上ではありませんよ。」

「母さま、お願い・・・。」

蒼紫は父親と間違えられているのだ、とは思っていたが、母親が娘の言葉に取り出した袋から出た代物で、その記憶は決定的なものになった。

緑色に光っていたそのガラスは――――。

「これで気がすみましたか。」

母親はそう言うと、すぐにガラスのかけらを元にもどしたが――――。

そして先代はなぜ「脱藩ですか。」と声をかけたのか。そしてその娘が巴だとしたら、縁は何故いないのか。まだ生まれていなかったということなのか・・・・。

はっ、と蒼紫は目を覚ました。

今彼らは中山道のはじめの宿場、武州街道の蕨あたりを歩いているところだ。彼がいるのは、その旅籠の二階である。まだ今は平和な道行だった。巴は下の間で弟の縁と休んでいる。もちろん、彼ら御庭番衆は地味な庭師のいでたちで街道を歩いており、旅の目的も伊勢講に出席するためというふれこみである。次の宿場町まではいよいよ上州の山の中だった。彼らを追う葉霞たちはまだ街道筋には

現れてはいない。

「若、おはようございます。」

般若が蒼紫のいる部屋にやって来た。例の般若の面はつけたままである。般若の面は見た者のだれもが不気味に思ういでたちだが、狼藉者がこのような歌舞いた面をつけているのは江戸ではよくある事であり、般若もそういうつもりで面をつけている。というか、彼の面の下の顔は薬品で醜く焼け爛れているからなのだ。この般若を気の毒に思ってか、猩々も同じように能の面をつけている。猩々緋の面だ。山猿に似ている自分を揶揄しての行為であろう。

彼ら御庭番衆はそういう風に、自分を演出するのは得意であるが、そのことについてお互いに問答することはなかった。特に蒼紫の元に集まった者らはそのような個人主義者が多かった。蒼紫自身がそういう性格なのも影響しているのであろう。

般若は言った。

「あの娘を単独で見張れと頭目(先代のこと)から命じられてから半月。このような妙な事態になるとは思いもよりませんでしたな。」

蒼紫は答えた。

「瑠璃ガラスが上様が最近ご執心であるとのことで、命じられたことだ。本当はそうではないだろう。あの娘がいた藩の醜聞の後始末ということだな。しかし、目的の峠でその朱印状を見つけたなら、あの二人はすみやかに逃がす手はずを取れ。御庭番衆とかかわりがあったということも、すべて

消すのだ。」

般若は黙って聞いていたが、少ししてぽつりと言った。

「残念なことですな。」

「何がだ。」

「若にしては江戸にいた頃、熱心にあの娘が婚約者と往来に出るのを、忍んで観察しておられた。確か車夫に化けて往来で見ておられました。今も行動をともにしているのは、願ったりかなったりではないかと。」

「貴様も頭目と同じ言い様をするのか。」

蒼紫は立ち上がると、二本の剣を鍔鳴りをさせて腰にさした。

般若は少しおっくうな姿勢になった。そしてあわてて取り繕うように言った。

「何も、私はただ、蒼紫様が普通の人間らしく見えるので、よいと思って言ったまでです・・・・。」

蒼紫は般若に取り合わず、話題を変えた。

「ところで、葉霞たちのほかに、誰が追手になるかわかるか。」

般若は驚いた。そして、やはりそこまで考える蒼紫を頼もしく思った。般若は答えた。

「さあ・・・・真田の里はここから近いですがな。真田忍軍やもしれませぬな。」

「そんなやつらは来ないだろう。おそらく西の御庭番衆だな。」

「翁のところですか。」
「翁は動かん。しかし巴は翁のいる京都に連れ去られる可能性が高い。用心しないといけないだろう。」
「では・・・。」
「おそらく、追手は『闇の武』だ。」
般若はひやりとした。こういう時の蒼紫は問答無用である。蒼紫は続けた。
「われわれのこの往路のどこかに潜んでいるはずだ。この任務が終了し次第、巴はやつらに京都に間者として送り込まれるはずだ。それを阻止せねばな。そして――――われらとはかかわりのない土地で、この幕府の始末事にもかかわらずに暮らせるようにしてやらねばならん。」
「御意。」
般若は思った。蒼紫は本当は、その巴とともに御庭番衆から離れたいのだ。しかし、それができないので、こういう言い方になるのだ、と――――。
「今日は幸い、いい天気でございますな。この先の横川の関所と碓氷越えは、のんびりと行きたいものです。」
般若は蒼紫の意気込みをそらすように、わざと天気の話題をふった。蒼紫は答えずに部屋を後にした。

暁杜　「山霞」
著　者：おだまきかこ
発行日：2010年08月17日

発行所：Obunest
EAST Co., Ltd./Obun Printing Company, Inc.
運　営：イースト株式会社
http://www.est.co.jp/
PDF変換：欧文印刷株式会社
印刷・製本：欧文印刷株式会社
http://www.obun.jp/

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが下記のアドレスにご連絡ください。
mybooks_info@est.co.jp

201008170105-p007-75C325

abunest
mybooks.jp

201008170105-p007-75C325

背表紙は左のようになります。
半角英数字を使用している場合は半角英数字だけ90度回転した状態になります。
なお製本サービスをご利用の場合、総ページ数が一定のページ数（モノクロは121ページ、カラーは141ページ）に達しない場合は背表紙に文字は入りません。
ご承知おきください。

暁杜　「山霞」

おだまきかこ

英数字が90度回転しないようにするには....

お申し込み画面の「書籍のタイトル」と「著者名」を入力するときに全角文字で入力してください。

＜英数字を半角で入力した場合＞

子育て日記 VOL. 2

▼

子育て日記 VOL. 2

＜英数字を全角で入力した場合＞

子育て日記 ＶＯＬ．２

▼

子育て日記 ＶＯＬ．２